

デジモンテイマーズ

第3話

レナモン対ギルモン！  
戦いこそがデジモンの命

第3稿

脚本／小中千昭

Animation Play by Chiaki J. Konaka

2000／12／23

登場人物

松田 啓人「タカト」(10)

李 健良「リーくん／ジェンリヤ」(10)

牧野 留姫「ルキ」(10)

ギルモン

テリアモン「ガルゴモン」

レナモン

クルモン

淀橋小学校

浅沼奈美(26)……………担任教諭

塩田 博和(10)

加藤 樹莉(10)

北川 健太(10)

両親達

松田 剛弘(41)……………タカトの父親

松田 美枝(35)……………タカトの母親

李 小春(07)……………リーの妹

大学生の男1

同 2

同 3

小さな男の子

その母親

ジッポの男

前回リプライズ／前回のシーン・ダイジェスト

N 「タカトが自分の想像で産み出したギルモンは、まだタカトが言う事も判らないが、タカトとギルモンは少しづつ友達に近づいていた。しかし、現実世界に現れたデジモンは、ギルモンだけでは、なかった」

中央公園／裏道（前回リプライズ）

ギルモンに命中する光の矢！ ドオオオン！  
ギルモン「わあっ」

ギルモン、吹き飛ばされ、金網を凄まじく凹ませる。  
タカト「ギルモン！」

続けざまに光の矢がギルモンに放たれる。  
ドドン！ ドドン！

タカト「ギルモン！」  
キッと、見上げるタカト。

留姫の声「（抑揚無く）レナモンは闘いたがっている」  
タカト「誰だよ！」

ぬっ、と木立の陰に立つ、瘦身のデジモン。  
そして、小柄な少女。

留 姫「どきなさいティマー。デジモン・バトルだよ」  
タカト「ええっ」

サブタイトル

中央公園／裏道

ギルモン「うー……」

痛いという感じではなく、目を回しているギルモン。  
タカト「（駆け寄り）ギルモン、大丈夫」

ギルモン「だいじょうぶもん？」

タカト達のいるところへ降り立つ留姫とレナモン。  
留 姫「——あんだ、ティマーじゃないの？」

タカト「ぼ、ぼくはテイマーだ！（ゴーグルに無意識に触れる）」  
キョトンとタカトを見上げるギルモン。

留 姫「そ。なら早く決着つけよ。デジタル・ワールドが出て  
ないから、他の人に見られちゃう」

タカト「決着って、何でこんな酷い事するのさ！ ギルモンはま  
だ生まれたばかりなんだぞ！」

留 姫「（怪訝）生まれたばかり？ それで幼年期っていうの？」  
タカト「え？ あ、うんと、違う。ギルモンは成長期、僕、そう  
いうつもりで考えたんだけど」

留 姫「考えた、って……。 （苛立つ）どうでもいい。レナモン」  
レナモン、さっと威嚇態勢。

タカト「や、やめてよ！」

留 姫「いい加減にしなさいよ。テイマーなんでしょ？ デジモ  
ンは何の為に生まれたのか判ってるんでしょ？」

タカト「——何の、為って……」

ダツ！ レナモン、俊敏にジャンプし——

タカト「！ ギルモン！ 逃げてえええええ！」

ビシニビシニビシニ 光の矢が次々に放たれる。

タカト「わああああっ！」

しかし——、ギルモン、身の回りに光の矢が落ちて  
も動ぜず——、キツと見上げる。

木の上に立つレナモンを見るその目——、野生の輝  
きでキラキラと輝いている。

タカト「ぎ、ギルモン……」

ギルモン「グワオオオオオッ！」

獣の咆哮。そう、ギルモンは野生の生き物。

真っ赤な光弾を口から放つギルモン。

ゴオオオオオ！ それがレナモンを襲う！

ドオオオン！ 太い木の枝が破碎。しかしレナモン  
は俊敏に一旦回避し——、再度、突っ込む！

レナモン「くおおおおおおんんん！」

レナモンPOV

レナモンの視界がギルモンを捉える。  
パラメータを表示する枠がワイプ・インするも――  
狂ったデジモン文字が踊り――

S「Not Found. Unidentified Wild One.」  
留 姫「(オフ)データに無い。何なのこのデジモン！」

中央公園／裏道

二体のデジモン――、激突！！

タカト「！」

留 姫「……」

レナモンの鋭い爪がギルモンの片目を掴み、  
ギルモンの牙がレナモンの片腕を噛んでいる。

ギルモン「(獣の喉の鳴らす音)」

タカト「(慄然)――ギルモン……(首を横にやや振る)」

ともだち が、あんな顔をして――

留 姫「だらしがないじゃない、レナモン」

留 姫、腰のホルダーからサツとカードの束を掴み

タカト「！ デジモンカード……」

留 姫、その束から一枚を抜き出す。

留 姫「ブースター、ヘヴィ・メタル！ カード・スラッシュ！」

タカト「アッ！」

留 姫、D・ARKにそのカードをスロットさせる。

D・ARKから光がレナモンに走ると――

レナモンの姿、瞬時輝き――、自由な方の片腕にイ  
ンパクト・ガンが装着されている。

タカト「インパクト・ガン。ぎっ、ギルモン！ 離れる。や  
られちゃうよ！」

しかしギルモンは呻きながら、くわえたレナモンの  
腕をぐいぐいと振り回す。

留 姫「(僅かに笑み)ウイナー、レナモン」

レナモン、ガンをギルモンに向け――、

タカト「ギルモン！ どうして僕の言う事聞いてくれないんだ！  
はっ、とギルモンの目、タカトを見る。」

レナモン、インパクト・ガンを振り下ろす！ バシ  
ユツ！ 火薬により檄鉄が引き上がり——  
と、ギルモン、レナモンの片腕をあっさり離す。  
よろけるレナモン。

レナモン「あう！」

ギルモン「タカト、どうしたの？」

トコトコとタカトの方に向かって歩いてくる。

留 姫「レナモン、構わない。今だよ」

レナモン、逡巡。背を向ける相手に攻撃など——

留 姫「（厳しく）レナモン。一度でも負けたら許さない」

レナモン「——くおおおん！」

レナモン、飛び上がり、インパクト・ガンを振り上  
げてギルモンに——

タカト「！」

と、そこに響く男の子の声。

リ ー「（オフ）やめるんだ！」

ハツとなってその方を見るタカト、留姫。

坂の上に、リー、そしてテリアモンが立つ。

タカト「——君は……」

レナモン、静かに着地。

留 姫「こんなにデジモンが出てきてるなんて知らなかった……」

テリアモン、とことことレナモンの前に行き

テリアモン「強いんだね。もうどれくらい戦ったの？ もう進化

出来る？」

レナモン「……え……？」

リ ー「（険しく）テリアモン、そんな事、聞いてどうする」

テリアモン「べーっにー。もーまんたいー」

リー、二人の前に来て

リ ー「なぜパートナー同士、デジモン同士で戦わせるのさ」

留 姫「（鼻で呷う）何言ってるの？ デジモンだからに決まっ

てるでしょ」

リ ー「君は駅の向こう側の子だね。僕たちと一緒にいるこの子

たちが、戦う道具だって、どうして思えるんだい」

リーがテリアモンの頭をそつと撫でるのを不快そう

に見て

留 姫「——何言っただかわかんない。レナモン、帰るよ」

留 姫、背を向けて去っていく。

レナモン、チラとリー、テリアモンの方を見て——  
留 姫が行く先の草むらへサツと身を潜める。

タカト「……（見送っていたが、リーの方を見る）」

新宿高層ビル群／夕刻

タカト「（オフ）リー君、だっけ？ 一組の」

リー「（オフ）君は二組だよな」

タカト「（オフ）——うん……。あ、僕はタカト。松田タカト」

リー「（オフ）リー・ジェンリヤ」

タカト「（オフ）中国の、人？」

リー「（オフ）お父さんが香港から来てる。お母さんは日本人だよ」

タカト「（オフ）ふうん……」

公園／裏道に面する鉄の扉

鉄柵の内側の、鉄扉が開いている。その中はコンクリ打ちっぱなしの、ガランとした物置。

その中でギルモンとテリアモン、じゃれあっている。

タカトとリー、それを並んで見ながら

タカト「テリアモンは、一緒に住んでいるんだよな」

リー「うん」

タカト「——いいな。ギルモン、大きすぎて、ウチじゃ隠せなくて、僕どうしようかってあちこち探してて——。でも、ちょうどいい秘密基地が見つかった」

リー「（微笑）良かったね、タカトくん。ギルモンは、君の、友達だよ」

タカト「ありがとう、リーくん。僕たちも、友達、だよな」

リー「（頷き）——テリアモン、帰ろう」

テリアモン「もーまんたいー」

リー「（やや厳しく）テリアモン？」  
テリアモン「判ってるよお」

テリアモン、とことことリーの側に来て、ちょん、と背中に飛びつく。

リー「じゃ、また明日」  
タカト「うん、学校でね」

ギルモン、タカトの側に来て

ギルモン「もつと、あそぼー」

タカト「（あ、と）ねーっ！ もーまんたいって、どういう意味なのー？」

テリアモン「気にすんな、気楽にいこう。テイキット・イ〜ジ〜」  
タカト「……（なんだか嬉しい気持ちになる）」

そつとギルモンに触れるタカト。  
くすぐったがるギルモン――。

松田ベーカリー／店内

タカト、帰ってきて

タカト「ただい（ま）――あ」

振り向く少女は、樹莉。タカトの母からイギリス食パンの包みを受け取るころ。

母「毎度ありがとうね、樹莉ちゃん」

樹莉「今帰ったの？ 松田君」

タカト「――うん……（どぎまぎ）」

樹莉「じゃおばさん、さようなら」

母「お母さんによるしくね」

樹莉「はい」

タカトの脇を通る時、立ち止まって耳打ち。

樹莉「体育の授業でいなくなっちゃった事、黙ってたから」

タカト「（ガッツ、そうだった）――う、うん、ありがと……」

樹莉、軽く手を振って、駆けていく。

眩しそうに見送るタカト、の脇にぬっ、と立つ父親。

父「段ボールと、別れて、きたのか……」

タカト「へっ？」



父 「（妙に哀しそう）生き物との別れは辛いものさ。うん」  
父、戻っていく。

タカト「……」

タカトの部屋

ベッドに寝ころがって、D・ARKを上にかざし見  
つめているタカト。

タカト「デジモンは、戦う道具……」

ぎゅっ、とD・ARKを握るタカト。

新宿東口／夜

アルタ前広場。つまらなそうな顔で、インナーフォ  
ンの音楽を聴きながらぼうつと人の流れを見ている  
留姫、三丁目方向に歩き出す樹莉。

俯瞰画面。

眼下を歩く留姫。

と、ビルとビルの間を、しなやかな動きで飛び渡っ  
ていくレナモンの影が留姫を追う。

西新宿高層マンション／リーの家

セントラル・パークの様に中央公園を見下ろす窓。

小春（リーの妹）「（オフ）ジェンにーちゃん、ご飯だつてー」

リーの部屋

小学生にしては、やや高度な計算機／ネット端末の  
システムが組まれている部屋。

モニタにはデジモン・ウェブのブラウザ。

ドアを開けて入ってくる、幼い妹。

机の上に、テリアモンがちょこんと座っている。

小春「（頭をぼんぼんと叩き）テリアモン元気ー？」

テリアモン「……」

リー「判った。すぐ行くからって」

小春「きょーおはすつきやつき、きょーおはすつきやつき」

即興歌を歌いながら出ていく小春。

リー「（テリアモンを見て）——ごめんな」

テリアモン「（ふう、と力を抜いてだらんとし）もーまんたいー」

リー、部屋を出ていこうとして——

リー「テリアモン」

テリアモン「何？ ジェン」

リー「——君も、進化したいのか……？」

テリアモン「……」

リー「君が進化して強くなっていったら、僕たちはずっと友達

でいられなくなる。何度も話しているよね」

テリアモン「何度も聞いているよ。だからしないって言ってるじゃ

ない？（軽く）」

リー「（やや寂しげな笑み）うん。あとで饅頭持ってくる」

耳をパタつかせて喜ぶテリアモン。

### 新宿中央公園/夜

たたたと駆けてくるタカト。両手いっぱい袋。

あの鉄柵の前に来て周りを見回し、中へ。

タカト「（小声）ぎるもーん！——、パン持ってき——ぐわっ」

### ギルモン・ホーム

唖然と立つタカト。

コンクリート打ちっぱなしの壁の一方が、どっと掘

られて倍ほどの広さになっている。

タカト「こ——、これ、どうしたの……？」

鼻をくくんくさせながら顔を上げるギルモン。

ギルモン「たかー、あそぼー、持ってきたの？」

掘ったホール状の穴の中で横たわっていたギルモン、  
ゆっくりタカトに欠伸をしながら近づく。

タカト「こんなに掘っちゃって……」

ギルモン「うん、いつぱい掘ったら、なんだかギルモン……」

ギルモン、タカトに寄り掛かる。

タカト「う、うわっ、重いよギルモン」

しかしギルモン、目を閉じて眠ってしまふ。

尻餅をついて、ギルモンの頭を抱えているタカト。

タカト「——（微笑）デジモンも眠るんだっけ……。今日は色々

あったもんね」

すやすやと寝息をたてるギルモン。

タカト「お休み、ギルモン。また明日ね」

靖国通り

雑踏その足元に、小さな生き物がちよこちよここと走り抜けていく。誰の目にもとまっていない。

クルモン「うわー人がいつぱいでくるー。どうしてみんなまつす

ぐ歩かないでくるー？ クルモン、不思議でくるー」

と——、クルモンとすれ違う様に歩いている留姫。

と、すれ違い際、大学生くらいの男三人連れの一人

が留姫を見て——

大学生1「（さっさと近づき）ねえ、君、もしかしてデジモン・ク

インじゃない？」

むっとした顔で見上げる留姫。

大学生2「何のクインだった？」

大学生1「去年のデジモン・カード・バトルで決勝まで行ったっ

ていう——」

大学生3「こ、こんなお嬢ちゃんか？」

留 姫「……」

大学生1「めっちゃ強いんだぜ、この子。カソード・タイマーの大

会じゃ優勝とかしてて——」

ふい、と顔を背け、歩き出していく留姫。

ふっ……。留姫の周囲を歩く人の姿が消え、車の灯、町の明かりがぼうつと滲む。

留 姫「——レナモン」

留 姫の背後にすっと立つレナモン。

レナモン「何、留姫」

留 姫「レナモンだって、強くなりたいよね」

レナモン「——」

留 姫「強くなつてよ。もっと、もっと強く」

レナモン「強く、なる」

留 姫「（やや眉を蹙め）——（初めてレナモンを見て）だったらどうして進化しないの」

レナモン「それは……」

留 姫「もう随分敵を倒したよね。経験値上がってるよね。なのに何で進化しないの」

レナモン「判らない……」

留 姫「進化しないデジモンなんて——」

雑踏の中で立つ留姫。周囲の人の姿が戻り、レナモンの姿は消えた。

留 姫「——デジモンが友達？ くだらない」

留 姫の目がギラギラと輝いているのは、ヘッドライトのせい、ではない。

学校近くの児童公園 / 翌朝

ヒロカズ、ケンタらが、今朝もデジモン・カードで遊んでいる。

ヒロカズ「ブースター、輝きの泉！」

ケンタ「（がーん）」

タカトの声「おはよーっ」

ヒロカズ「（勝利の笑み）経験値40アップで、完成体進化。戴きだぜっ！」

タカト「（覗き込んで）またヒロカズ君の勝ちだね」  
ヒロカズ「へへっ」

ケンタ「それずっこいよ」

ヒロカズ「何がずっこいんだよ。ただ次々デジモン繰り出せばいいってもんじゃない。ブースターの使い方が、ティマーとしての力の見せどころなんだって」

タカト「——（呟く）そっか……、そうだった……」

フラッシュノ前夜のバトル

留姫、カードをD・ARKにスラッシュする。

新宿中央公園前の道

公園南側、十二社通りに、艶消しオリブドラブの窓の無いバスが数台止まっている。何のマークも無く、天井には大きめのアンテナ（テレビ中継車風）。

同ノじゃぶじゃぶ池

「工事予定地ノ調査中ノ立ち入り禁止」のテープが張られた、池敷地内には、5、6人の白い作業服、ゴーグルにマスクの男たちが、地面を金属探知機の様なセンサーで調査している。

無線の声（はつきり聞こえない）「（ノイズ）新宿中央公園噴水

現場調査続行中。現状、インフェクトの痕跡発見出来ず」

無線の声2「（ノイズ）センサー了解」

カチン、カチン。

ずっと、その現場の前に立つ黒いスーツ姿の男（顔、上半身も見えず）。

左手でジッポの蓋をかちかちと開けたり閉めたり。ゆっくりと歩いていくと——、

男の靴の前に、カードが突き刺さっている。

拾い上げる男の手。

それは——、留姫が使った、カード……。

淀橋小学校／タカトのクラス

社会の授業をしている、奈美。

奈美「——ええとだから、今の私たちの暮らしては、もうネットワークがなくてはならないっていうこと——」

チャイムが鳴った。

奈美「（嘆息）どうして予定通りまで行けないのかな……」

生徒たち、怪訝そうに奈美を見ている。

奈美「じゃここまでよ」

日直「きりーっ」

立ち上がる生徒たち。

淀橋小学校外観

都庁などの摩天楼群を公園の向こうに望む学校。

日直「（オフ）れーい」

校舎から、ボールを持って飛び出してくる生徒たち。

タカトのクラス／休み時間

ヒロカズのテーブルに集まっているタカトたち。

ヒロカズ「——今度の大会に俺出てみよっかな」

タカト「（顔を輝かせ）いいなっ！ 僕も出てみたい」

ケンタ「けどさー、強い奴っていつぱいいるもん」

ヒロカズ「そうだ、強い奴って言や、この近くにもいたっけ」

ケンタ「え、誰のこと」

ヒロカズ「デジモン・クイーン。去年の大会で準優勝したの、女

子なんだぜ」

タカト「——え？」

ケンタ「そんなに強い女なんているー？」

ヒロカズ「知らないのかよ。冷酷なるデジモン使い、容赦ない攻

めは、高校生でもビビるって」

タカト「その、ティマー……」

ヒロカズ「ん？ 何タカト」

タカト「この近くに、いるの？」

ヒロカズ「ああ、確か駅の東っかわの学校に行ってる奴だよ」

タカト、無意識に窓から外を見る。

タカト「（呟く）どっかで見たって気がしてた……」

と、樹莉が通り掛かり

樹莉「あたしカードだったら、タロットとかの方がいいな」

タカト「（ぎくつ）あ」

ケンタ「タロットでバトル出来るかよ。カード・バトルは男の勝

負！」

樹莉「それってひどい差別発言だと思う（笑いながら）」

ヒロカズ「俺がコーチしてやるからさー、加藤も大会出ようぜ！

デジモン・クイーンの座を奪ってくれよー」

樹莉「ばっかみたい。美紀ちゃん、待って。あたしも行くー」

くすくす笑いながら樹莉、女子と教室を出ていく。

タカト「デジモン、クイーン……」

中央公園前／放課後

懸命に駆けてくるタカト。

ちょうど十二社通りを、バス群が出立するところ。

なんだろうと、見送る内に、不安がこみ上げてくる。

タカト「——ギルモン！」

公園内裏道

走ってくるタカト、鉄柵に向かうが——、

開いている鉄柵。

タカト「ギルモン！」

ギルモン・ホーム

扉を開け飛び込むタカト。

パンが入っていた袋が空になっているだけ。

タカト「（泣きそう）どこいっちゃったの？」

公園内

タカト「ギルモン！ ギルモーン」

息が切れた。膝に手つき、はあ、はあ、と立ち止まるタカト。

タカト「ギルモン……」

と——、電子音が響く。

タカト「？」

タカト、シャツの下から覗く、D・ARKを手にとる。液晶部が弱く明滅していた。

タカト、D・ARKをぐるぐると周囲に向ける。

ピーーツ！

鬱蒼とした茂みのある方で反応が強まった。

タカト「——」

茂みの中

タカト、道から中へ入ってきたところ。

タカト「ギルモン！ ギルモンいるの」

と——、ぬっ、と茂みから首を出すギルモン。

ギルモン「タカトー」

タカト「（深い安堵）良かったあ……。ギルモン、またどっかに行っちゃったかと思ったよ」

ギルモン「だって、おうちの中だけじゃつまないんだもん」

タカト「——そりゃそうだよね……。僕だって、あんなところでずっといたらヤだもん……。でも——、ギルモン大きいからなあ……」

ギルモン「どうしてギルモン、好きなところ行けないの？」

タカト「そりゃあ、普通そんな恐竜みたいな格好したの、いないから……」

小首を傾げているギルモン。

タカト「——普通……、どうなんだろ……」



タカトとギルモン、とことこと歩いている。

振り向く者もいるが、知らんぷりが殆ど。

母子連れの小さな男の子が近づいて

男の子「ねえ、これ何て言うデジモン？」

タカト「え？ これはね、ギルモンていうんだよ」

男の子「ギルモンなんて知らないー」

タカト「そりゃそうだよ。だって僕が作ったんだもん」

男の子「へー、いいないいなー」

男の子の母親「とつても良く出来てるのね。さ、りっくん行くよ」

男の子「ギルモン、ばいばい」

ギルモン「ばいばい」

タカト「——案外、みんな平気みたい……。うふふつ。なあんだ。

心配して損しちゃった」

ぴぴぴ。D・ARKが違う反応をした。

タカト「れ？ どうしたんだろ……」

目の前にD・ARKを持つてくるタカト。

液晶に浮かぶ、レナモンの姿。

タカト「レナモン！」

と！ いきなりギルモンの目が鋭くなり、急にどす

んどすと駆け出す。

タカト「ぎっ、ギルモンどこ行くんだよ」

道路高架下駐車場（NSビル隣のイメージ）

ギルモンが奥に向かって走ってくる。

タカト「待って！ ギルモン」

奥の暗がりを見てハツとなるタカト。

タカト「——デジモン・クイーン……」

陰の中から現れる、留姫と、レナモン。

留 姫「デジモン同士は引き合うもの。だって、自分以外のデジ

モンは、戦う為にしか存在しないんだから……」

タカト「そんなのいやだっ！ わけもなく戦うなんて、ギルモン

にさせたくないよ！」

留 姫「わけ？ わけなんて無いって言うてるでしょ。これはデジモンなの。そのギルモンと戦って、レナモンは進化する。それがデジモンのルール」

タカト「ギルモンを吸収しちゃうっていうのか。絶対に嫌だ！  
しかし、ギルモン、ずっと前が出る。既に戦う事が本能として機能し始めている。」

タカト「ダメだギルモン！」

留 姫とレナモン、すつと後退し、霧の中へ。

ギルモン、それに続いて入ろうとする。

タカト「ギルモン！」

ギルモン、光弾を吐く！

どおおおん！ 爆破（量子ノイズ化）を避け、身を俊敏にかわすレナモン——、光の矢を放つ。

ビシビシビシ！

ギルモンに突き刺さる光。しかし、ギルモンはひるまない。

ギルモン「ぐおおおつ！」

顔を歪めるタカト。最早ギルモンは、友達ではない。

タカト「ギルモン、だめ——、友達なんだから……」  
リーの声「（鋭く響く）いい加減にしたらどうだい！」

キツと睨む留 姫。霧の中へ、入ってくるリーとテリアモン。

留 姫「——邪魔しないでよ。そんなちびすけ、レナモンの相手にもならないんだから」

テリアモン「失敬だなー。ちびすけなんてひどいや」  
タカト「リーくん……」

リー「デジモンがこの世界に実体化している。これは異常な事なんだよ。デジモンは、確かにネットの世界では戦う為に存在している。だからって、このリアル・ワールドでもそうである必要は無いじゃないか」

留 姫「どこにいても、デジモンはデジモン。レナモン、関係ない。早く倒して」

レナモン「くおおおん！」

レナモン、ふっ、と姿を半透明化し——、得意技を出そうと身構える。

ギルモン「ぐおおおつ！」

二体が激突しようとした時——！

テリアモンが二人の間にとことこと歩いてくる。

リー「テリアモン」

レナモン「どいて」

レナモン、必殺技を既に撃ってしまっていた！

タカト「ああッ！」

きょとんと見上げているテリアモン——。

レナモンの必殺武器が襲う

ドドドドオオオオオン！

リー「テリアモン——（はっ）」

リーのD・ARKが、眩く虹色の輝きを放っている。

リー「！」

タカト「なっ、何……？」

ギルモン、レナモンも凝視。

ノイズの中に、巨大な影が、浮かんだ。

リー「（苦渋）進化、しちや駄目だ……」

タカト「——テリアモンが、進化した……」

ガルゴモン（テリアモン成熟期）「あはははははははっ」

見上げる巨体のガルゴモン、両腕のガトリングガン

をギルモンらに向け——、撃つニ撃つニ撃つニ

リー「やめろおおお！」

凄まじい攻撃！ 駐車場奥の壁が崩れる。

## 新宿副都心俯瞰

道路の高架下から立ち昇る煙。

## レナモンPOV

留 姫「（オフ）ガルゴモン——、テリアモンが進化した成長期。

必殺技はガトリングアーム！」

駐車場

天井に届く程の巨魁、ガルゴモンに飛び掛かるレナモン！

留 姫「レナモン！ そうよ！ 倒して！」

顔を覆われたガルゴモン、腕を虚空に泳がせ――

リ ー「！ まずい！」

タカト「えっ……」

ドガガガガガガガガガガ……

無差別攻撃をしてしまうガルゴモン。

奥の天井が崩れ始める！

やや離れた駐車スペースの車上にいるクルモン。

クルモン「（怯え）――どうしてケンカしてるんですか……？」

リ ー「（慄然）こうなるから、嫌だったのに――」

タカト「（はっ！）」

ガルゴモンの腕の銃口が留姫に向けられていく！

留 姫「……」

バシユツ！ ガスチャージされるガルゴモンのガト

リング銃！ 発射寸前！

タカト「ギルモオオオ……」

ギルモン「ぐおおおおおんんん！」

突進するギルモン…… 身体の大きさでは全くかなわ

ない筈のガルゴモンに激突……

リ ー「！――何てパワーだ……」

ズーン――。ギルモン、そのままガルゴモンを崩

れた壁に押し倒す。

静寂――。

小刻みに呼吸する、留姫――。

以下次回